

日本人の



第2部 忘れもの 5

オリジナルとは

京都という都市の美しさは、山紫水明の地に、千年の歴史が築いた、自然と人の手が織りなす、人工美の極致だ。町家の風情も、庶民の坪庭から御所に至る数々の庭も、整えられた千本杉が屹立する山並みも、先人から受け継ぐ技術を入々が切磋琢磨し、守り続けてきた証だ。

近ごろは、何かにつけ機械化、デジタル化と言って、いずれは何かもかも無人化されるような未来を描くものが多い。

私の仕事は、手描き友禅の着物を作る事だ。はたしてこれを、機械化、デジタル化し、無人化する事は可能だろうか。

作りたい着物をイメージしモチーフをスケッチする

手描き友禅の着物を作るには、まず、作りたい着物をイメージする。次にそれに必要なモチーフ、植物、鳥などをスケッチする。植物園や、動物園へ出かけるのは、学生時代からの基本だ。スケッチから文様を作る。そして、着物の形をした小さな紙に、デザイン(小下絵)を描く。推敲を重ね、原寸大の草稿を作る。

次に、一枚の着物をつくるための白生地(丹後や、長浜で織られた染用の絹布)を用意し、生地目によって鉄で裁ち、着物



手描き友禅訪問着「嵯峨菊」(1982) 嵯峨御殿をイメージし、嵯峨菊の咲く風景を描いている。御簾、嵯峨菊ともに文様化し、御簾に映るシルエットが秋の日差しを感じさせる。



羽田 登 染色工芸家

切磋琢磨でしか到達出来ない場所には、人にしか享受できない、美しい世界がある。

絞り出しながら、糸のように細い糊を置いていく。糊が乾いた後で、生地を水に通し、下絵の線を消す。糊の線(糸目)だけが残る。これを堤防にし、一筆一筆、色を差していく。使いたい色を調色(染料を混ぜて色を作る)し、その場でまた混ぜたり、濃淡をつけながら、色数に制限なく染めていく。

小さな刷毛を使ってばかりし入れ、小麦粉を溶いた一陳糊を使つて文様や細かな陰影を加える。色を差し終えたら、糊や蠟を用いて、全ての模様部分を細かく伏せる。模様部分は防水された状態になる。大きな刷毛を使つて、地色を染める。蠟や糊を落とし、高温で蒸し上げて染料を定着させる。



を経て、箔を置き、もう一度着物の形に縫い上げ(上絵羽)完成する。現在のデジタル技術で、出来上がった一枚をスキャンし、絹布にプリントする事は、精度はまだ甘いが可能だ。だが、コピーでなくオリジナルが作れなければ、無人化することはできない。

オリジナルを作るには、アイデア、

技術は言うまでもないが、人の心を動かす情感、叙情性など、人にしか感知できないものが不可欠だ。それを緻密に表現する繊細な技術には研鑽が必要だ。そこには苦勞もあるが、喜びや楽しみがある。これは美術、工芸、文学、音楽等、人々の築いてきたあらゆる文化に通ずる。

デジタル化、機械化が叶わないもの。人々の切磋琢磨によつてしか到達出来ない場所には、人にしか享受できない、たまらなく美しく、おもしろい世界があるのだと思う。京都にはまだそれがたくさんある。

オリジナルに必要な心を動かす情感、情緒性

これで水元(余分な染料を洗い流す)の後は洗濯しても色が落ちない。乾燥後は湯のし(蒸気で生地幅を整える)



●はたのぼる 1938年、京都市生まれ、染色工芸家、日本工芸会正会員、64年、京都市立美術大(現京都市立芸術大)本画科卒業、79年、第26回「日本伝統工芸展」に友禅訪問着「夕東風」を出展、初入選。2006年、京都府指定無形文化財「友禅」保持者に認定。11年、京都府指定功労賞受賞、旭日双光章章章。

戦後、日本人は物の豊かさと引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)P.75 掲載します。

きょうの季寄せ(七月)

斑猫や 松美しく 京の終

石橋秀野



前書に「鳴瀧といふに一時の宿りを得て」とあるので、「京の終」はここだと知れる。

「斑猫」は、人が近づくと先へ飛んでは止まり、止まりする昆虫。「道おしえ」の別称を持つ。斑猫に案内されるがごとく松美しい鳴瀧までやつてきた、という句意である。

秀野は評論家山本健吉の妻、宇多野での療養生活はまだ先のこと。(文・岩城久治)

「きょうの心伝て」

青木勝也 公務員 滋賀県大津市/38歳

世間体を尊重した日本人 「世間が許さない」「世間様に顔見せできない」。これまで日本人は「世間」という目に見えない規範を尊重することで野暮な行動に抑止力が働き、高いモラルが保たれてきました。しかし昨今、個の優先、個性の尊重ばかりが叫ばれ、「世間」が軽視されつつあります。その結果、〇〇モンスターといった相手に無理な要求をする人、路上に座り込んでいる人など、モラルを乱す人が増えたのではないのでしょうか。

日本人が気にかけてきたのは「世間で恥をかかない」「世間体を失わない」ということであり、自分の恥も名譽も「世間」を通してのみ実現すると考えていました。しかし「世間」が軽視されると、「恥」への意識も希薄化し、「他人に迷惑をかける」ことがどういふことか分からなくなつてしまつたのだと思います。

「世間様が許さないから駄目なもの」は駄目だ」と理屈無しに断固と言える風潮が、モラルの低下した現代の日本社会に必要なではないでしょうか。

「きょうの心伝て」募集

●あなたの思う「日本人の忘れもの」は何ですか?暮らしの中で忘れてはならないと思ふ日本人の心の承継や、伝えたい京都に残る心遣いなどを寄せて下さい。京都新聞社で選考、添削する場合があります。原稿は返却いたしません。タイトル(12文字以内)と本文(400文字以内、郵便番号、住所、氏名(匿名は不可)、職業、年齢、電話番号を明記し、〒604-8577 京都新聞COM「きょうの心伝て」係まで。 E-mail: yasunonohi@kyoto-np.co.jp Fax: 075-26212200

●日本人の忘れものは、京都新聞ホームページ http://kyoto-np.jp/kp/kyo_nm/info/nwc/ でご覧いただけます。

石清水八幡宮

都の裏鬼門に位置する国家鎮護の社

世は変われども 神は変わらざる